

平成29年度就労準備支援事業従事者養成研修 －対象者別の特性理解(1)「ひきこもり」

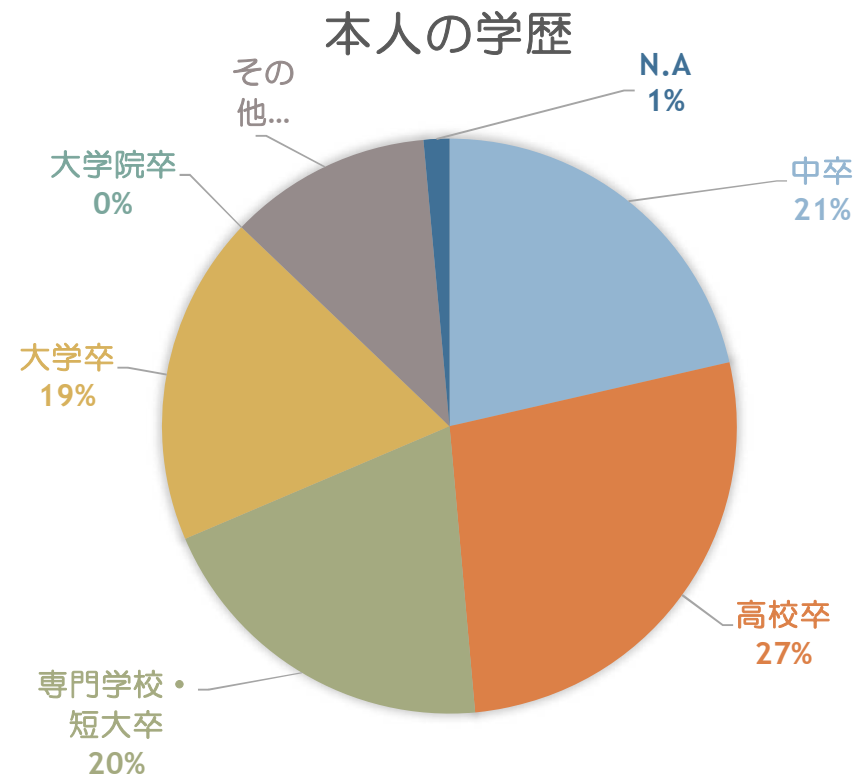
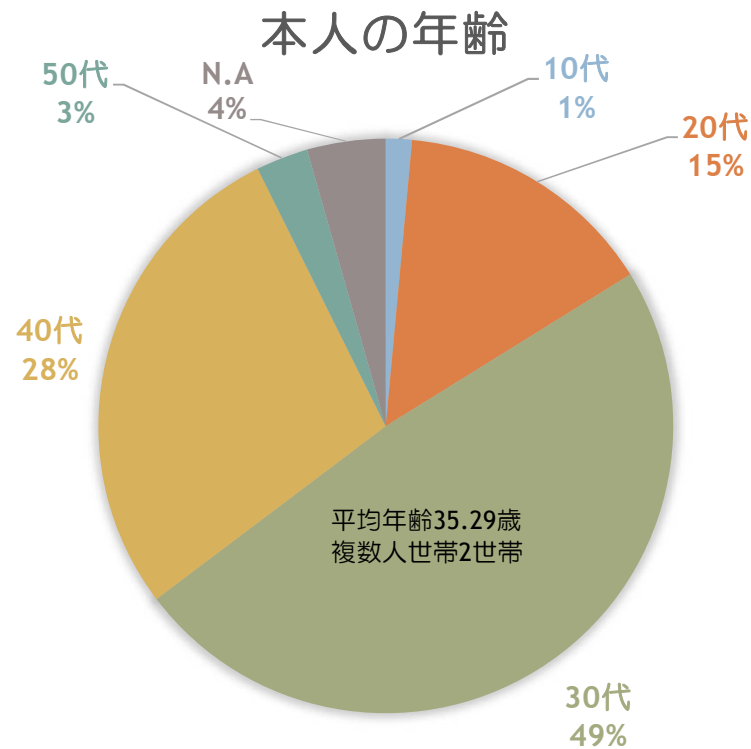
NPO法人レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク 田中 敦

1

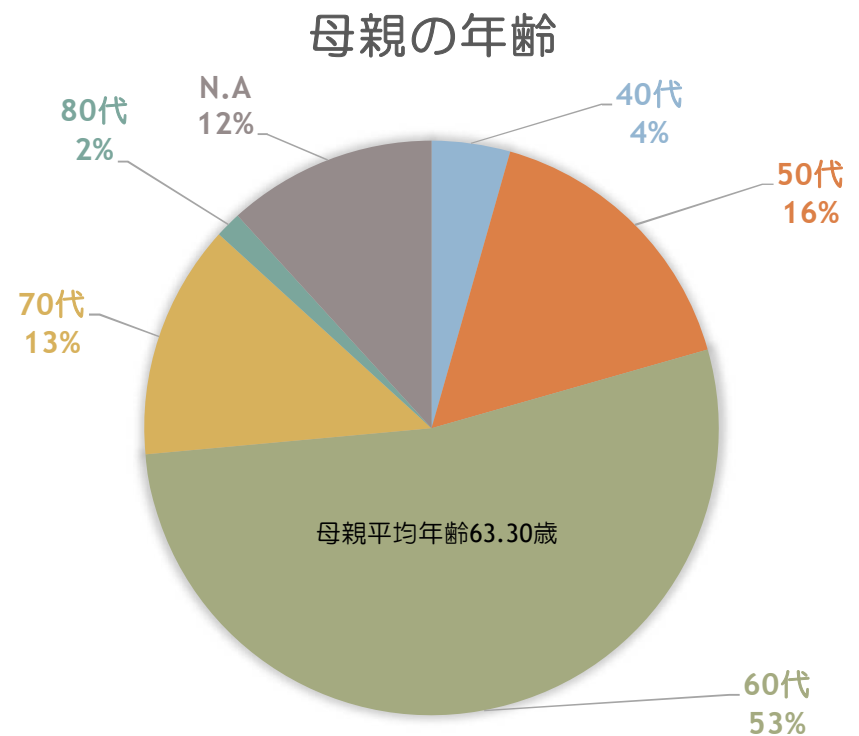
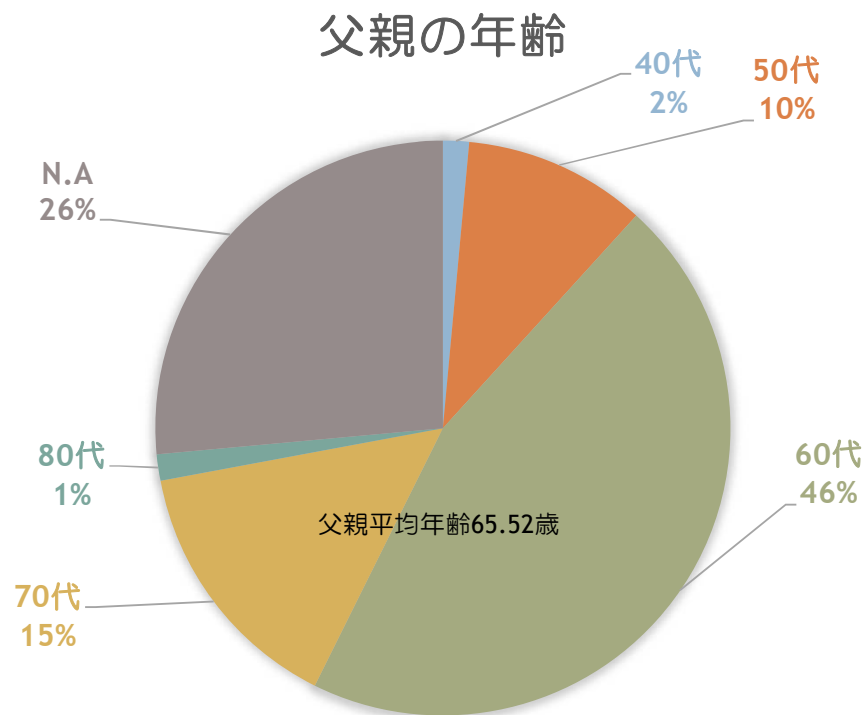
これまでの中高年層の多様な見解

- 例えば、長年医療機関の外来診療においてひきこもり臨床を経験してきた精神科医の中垣内正和（2008年）によれば、ひきこもりの「高年齢」の定義区分を都会と地方では高年齢化の様相は異なることを指摘したうえで、高学歴になる大学院中退・修了のひきこもりの比率が高くなることを挙げ「高年齢」の基準を40歳ぐらいにしたほうが良いと述べている。
- また、2005年に内閣府政策統括官(共生社会政策担当)が発表した「青少年の就労に関する研究調査」では、付論として「中年無業者の実情」にかんする調査結果が報告され、35歳から49歳までを「中年」として位置づけている。2002年度では全国に89万人いるとされ、北海道内では、2002年度で約2万人だったものが、2007年度には約3万人まで増加しているという。こうした中年無業者は1999年から2000年初頭に発見されてきたが、この定義区分から判断すると「高年齢」は50歳以上となるものと推察される。
- また、NEET(若年無業者:not in education, employment or training)を我が国で明らかにし、2012年には20～59歳の未婚で無職の男女のうち、社会と接点がない孤立無業(Solitary Non-Employed Persons:SNEP)の実態について調査をすすめてきた玄田有史・高橋主光は、2011年時点で孤立無業者は162万人以上に達し、20代に比べ、より35歳以上の中高年層で孤立無業比率が上昇し、年齢別孤立無業比率では50歳～54歳の層が71.6%と一番高くなっていることを明らかにしている。ここで示される中高年層とは35歳から59歳までを意味している。
- さらに、精神科医の斎藤環や藤森克彦は「2030年問題」を指摘している。斎藤環はひきこもりの未来を予測して結果的に就労をしないまま親の保護のもと60代に達し老齢基礎年金を受給するひきこもり当事者の登場を指摘し、「40代のひきこもりは少なくとも10万人は超えるだろう。若いときにひきこもった人が、社会復帰しないまま年を取っている。このまま行けば2030年には、60代の4分の1が単身者で、そのうちのかなりの部分をひきこもりの人が占める可能性がある」と述べる。藤森克彦もまた直接的にはひきこもりには触れないもの今日の30代の若者が50代となった時、50代男性の4人に1人弱が単身世帯となることを指摘している。

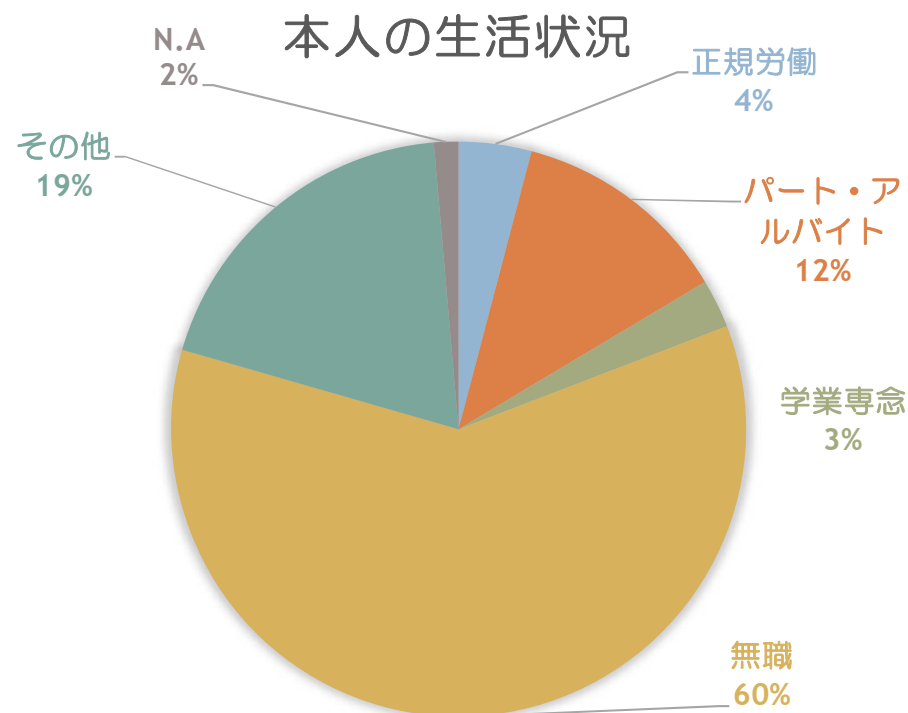
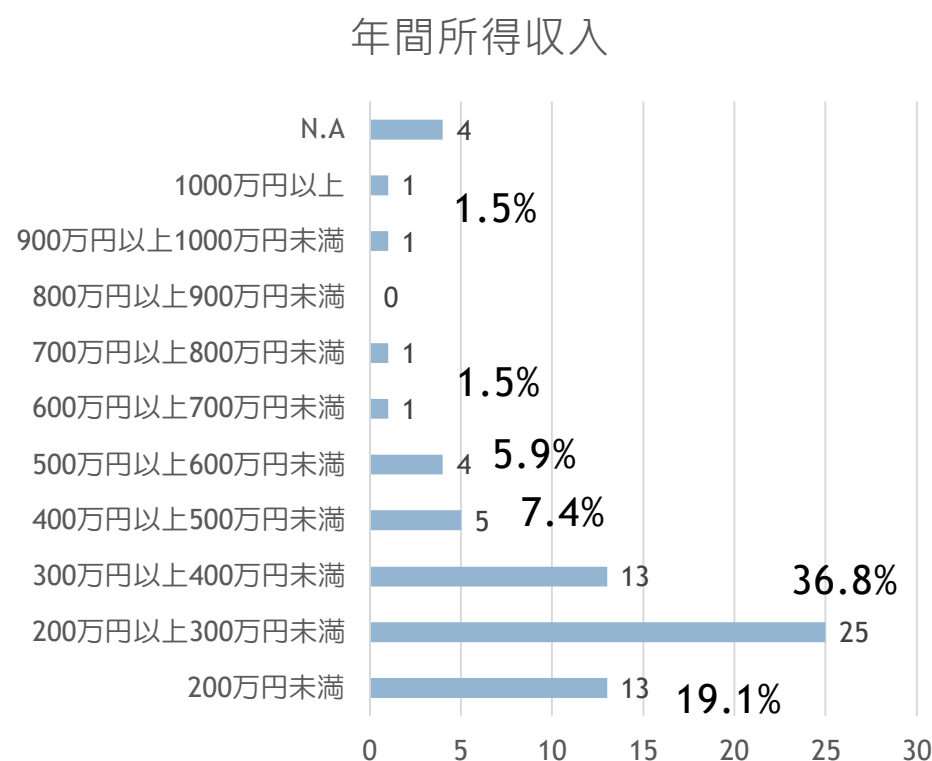
本人の年齢・学歴 N=68



家族の年齢構成 N=68

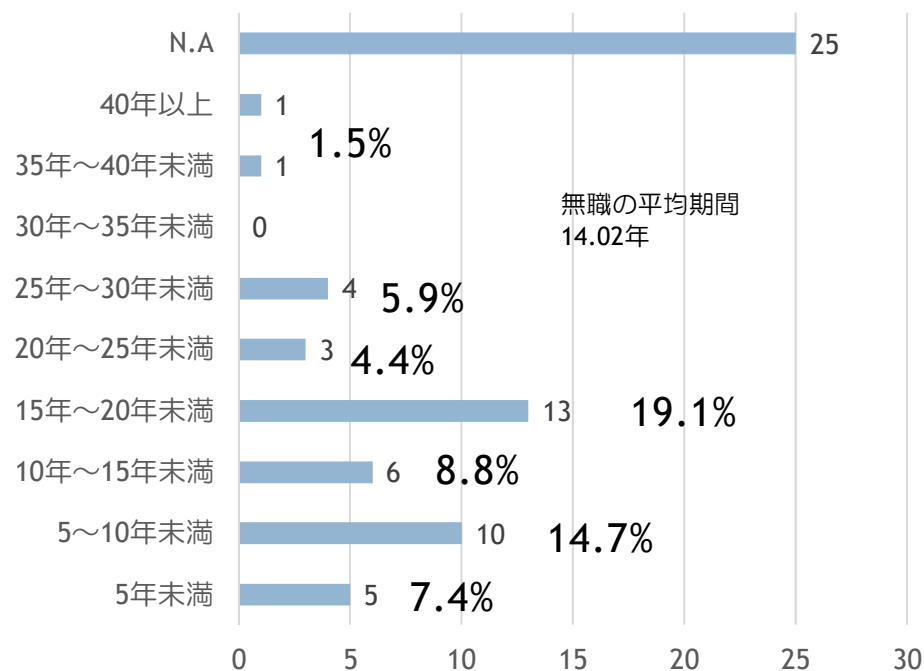


本人を支える世帯の年間所得収入 N=68

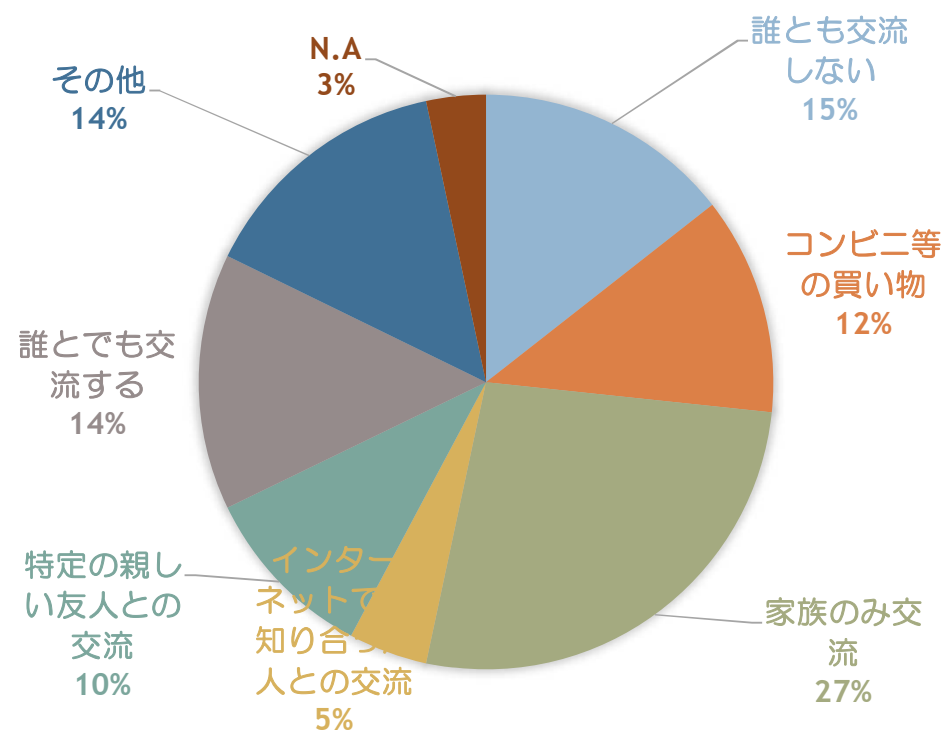


無職の期間及び社会交流状況 N=68

無職の期間



本人の社会交流状況



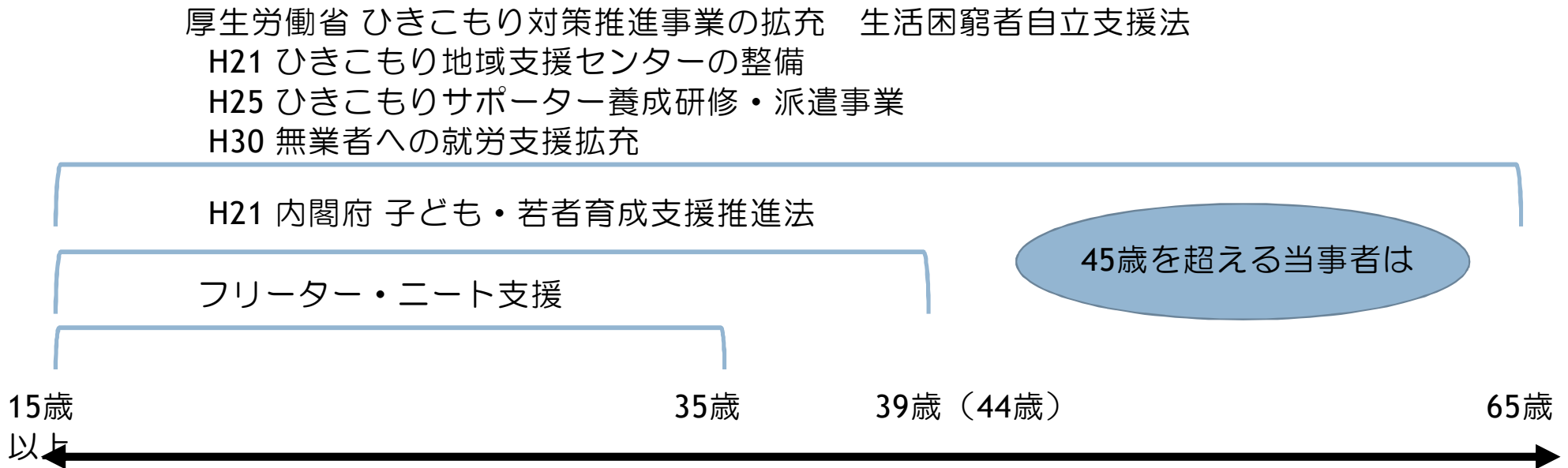
ひきこもりの高年齢化する背景

- アルバイト以外の就労経験を持つ事例はほとんどない（斎藤環,1998）⇒就労経験を持つひきこもりが拡大し誰もがひきこもりになりうる社会へ
- 就労経験を有するひきこもり当事者は社会経験歴があるがゆえに第一歩を踏み出せない人たちがいること⇒自分より年齢の年下の人に支援されることに対する屈辱感など
- 年々加齢していく自分の年齢によっていったんルールから外れた人たちがもう一度戻れるチャンスが狭まれていること⇒仕事は選ばなければ必ずあるという言葉は、あなたにはもう選択できる余地がないなど
- 児童福祉や高齢者福祉があっても青年期や成人期福祉が未整備の現状であること、また労働環境の変化により企業福祉の衰退がもたらすセーフティネットが極めて脆弱であること⇒ひきこもり当事者を既存の仕組みや空いているポストに、はめ込む支援となり、当事者の特性に見合った就労になりにくい状況など
- 中高年ひきこもり当事者の自分は何をしたいのか、どうしたいのかわからないという方向感覚の弱さ⇒人並みに働きたい、しかし自分を偽ってまで働きたくないというせめぎ合いの中で、もがきながらひきこもり続ける実態

中高年ひきこもりの状況特性の理解

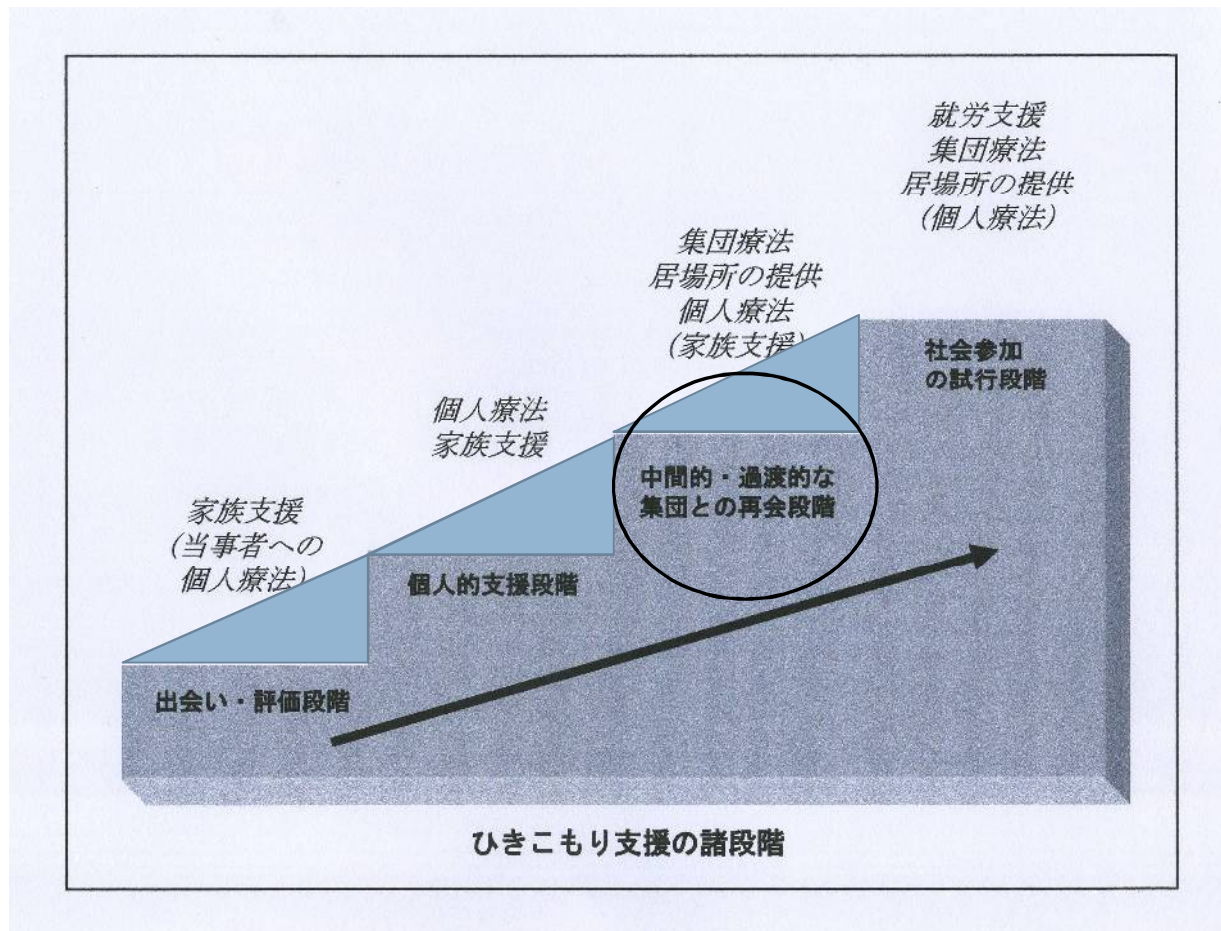
- 自己達成感が不消化で、過去の「いじめ（学校や職場）」や「挫折体験」などで心に傷をもち、社会的経験の機会も失い、年齢も高いことから将来に対して「不安感・絶望感」をもちやすくなっている。
- ひきこもり当事者の年齢が高いということは、これまで支えてきた親も高齢になっていることから、今後家族の支援だけに頼ることは難しく「周囲の支えや社会的配慮」がより欠かせない。
- 中高年ひきこもりは長きにわたり在宅状態にあり、将来に対して悲観的になりやすく「あきらめ」の境地になってしまう。そしてとかく地域から孤立無援になりがちである。
- また歪められた価値観（どうせ私なんかは～）に縛られ、自ら必要とされる有意義な仲間づくりや周囲からのサポートを頑なに拒む傾向になりやすい。他者との関係性というよりは徹底した自己排除に苦しむ。
- つまり中高年ひきこもりは「年齢」「履歴の空白」「社会経験の不足」「世間体」などにとらわれていることが多く、そのため一步を踏み出す機会を見失っている。
- その意味で、中高年ひきこもり当事者がもつ自尊心・誇りを傷つけないかわり方、支援のありようが検討されていかななくてはならない。

現行のひきこもり支援体系図

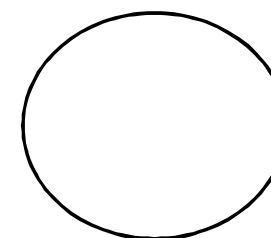


近年さまざまな法制度が整備されてきたが、残念なことにその主たる支援内容のおもむきが相談支援や就労支援にかかわるものに置かれ、ひきこもり当事者がお互いリカバリーを促進していくためにも必要不可欠な本来求められる居場所支援やピアサポート活動がまだまだ不足している課題が残る。

ひきこもり支援の諸段階に求める支援



ピアサポート活動



居場所支援

専門職との協働支援

就労を踏み出す土壌づくりとしての居場所

- 社会にも個人にも家族にも「余裕」そのものが見失われ、他者に対して攻撃的な要素が強くなりやすくなっている。こうした状態から自分を護るひきこもり当事者がまずは「安心」できる環境整備が求められ、就労を踏み出す土壌づくりとして自助会などの「居場所」の役割がとても重要となってくる。この「居場所」活動がさらに発展して「中間的就労」へと展開していく。「居場所」からさまざまな事業が創り出され、かつ運営母体として機能し、事業体そのものがひきこもり当事者にとって活躍する「居場所」になっていく可能性を秘めている。
- 「居場所」にはとくに決められたプログラムはなく、いつ来てもいつ帰っても構わないし、その場で語りたくなければ聞き役に徹することであってもよい場でもある。逆に話し手ばかりではなく聞き役がいる、ということが「居場所」では必要な働きを果たしていることが多くその場のよい雰囲気醸し出すことがある。「居場所」では決して否定されることも肯定されることもなく「ありのまま」の自分を受け止めてくれるところである。そこでは同じような仲間が集い自分だけではわからなかった新たな情報や刺激、勇気を得ることも少なくない。そして仲間同士の受け止められる行為（ピアサポート活動）を通していったい自分が何をしたいのか、これからどうしていきたいのか、その思いを少しずつ言語として表出していくことができるようになっていく。

就労準備支援に欠かせない居場所支援

- 今日「居場所」にはさまざまなひきこもり当事者やそのたち親和性をもつ人たちが多く集まる。毎日就労できない自分自身に爆発寸前まで悩み続けたひきこもり当事者がその「生きざま」を示すだけでもかけがえのない存在であり生き方であることをその仲間たちから学び、一般就労だけが就労の道ではないことに気がつき、社会からの価値観に縛られ続けてきた心が解き放たれ自分が今できることに当面取り組めるようになったというケースも見られる。私たちNPOの実践もまた立派な社会的な仕事であると思えるようになったという。こうしたNPO活動そのものにも社会一般に通じる対等な就労としての「対価」が認められていくことができればひきこもりに対する見方や考え方も変わっていく。
- 「居場所」はこうして就労に踏み出すさまざまな力を蓄えていく重要な場であるが、残念なことに今日においては地域の中でひきこもり当事者が元気になるために必要な、彼らが何回でも失敗しても認められ安心して過ごすことができる「居場所」は、現時点いかなる社会制度にも位置づけられていないのである。そのためほとんどの「居場所」は理解ある無償ボランティアの人たちによって運営されており、資金繰りに苦しめられていることも多い。「居場所」づくりを就労準備支援にとって欠かせないものとして制度的に位置づけていくことが今後の課題である。

当事者会「SANGOの会」

非公開 非公開

初心者例会は少人数

通常例会にはゲストも

SANGOの会例会外企画 体調

非公開 非公開

健康づくりというよりは「体調」を整える トレッキングやストレッチ

SANGOの会例会外企画 中間労働

非公開

- 社会福祉法人札幌市社会福祉協議会 ボランティア活動センターのDM便作業受託（2010年1月～）
- 参加した当事者には実費弁償1回につき現金500円支給される 月2回開催
- 当事者だけではない職業人との交流が楽しみ

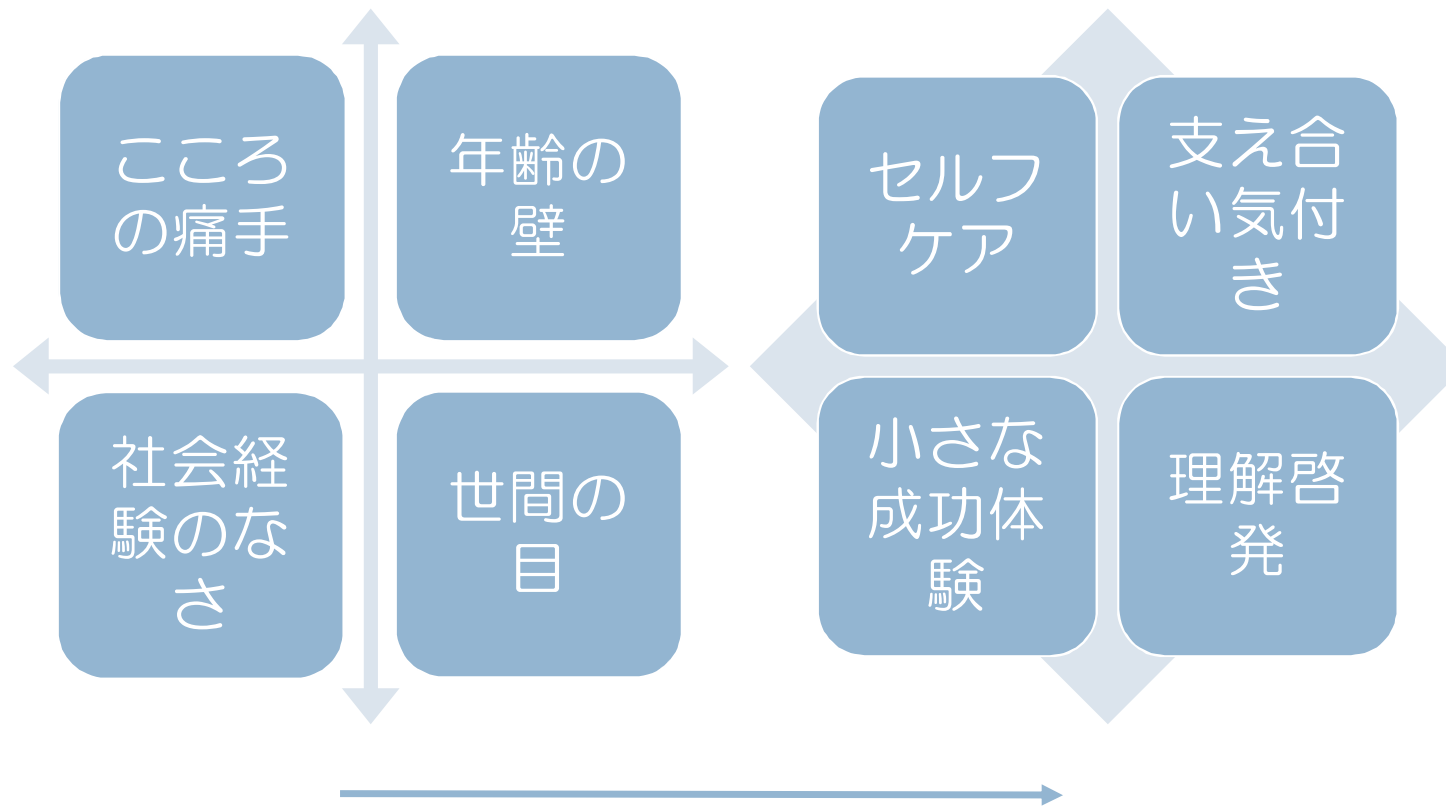
会報「ひきこもり」通信

<http://letter-post.com>

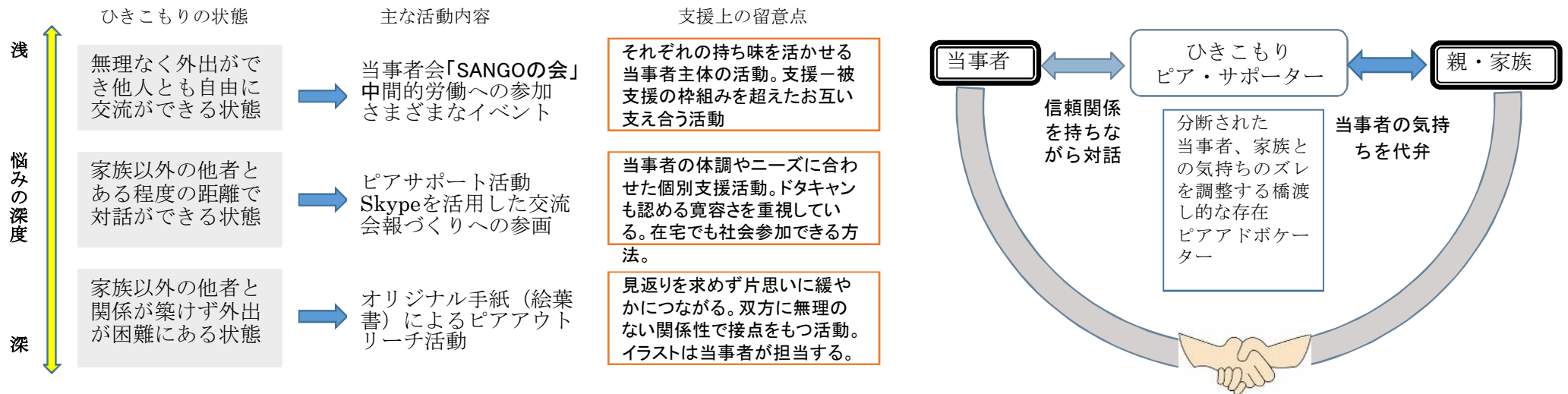


在宅にいても無理なく社会参加し、地域の理解啓発を図る

当事者による居場所支援の目標



ひきこもりピアサポーターの立ち位置と活動内容



NPO法人レター・ポスト・フレンド相談ネットワーク

双方無理のない緩やかなつながりを 手紙を活用したアウトリーチ

ピアサポーター

- ①. 守秘義務
- ②. 個人差出名で送る
- ③. 返信を求めない
- ④. 学校や仕事のことには触れない
- ⑤. 絵葉書や切手には工夫を凝らす
- ⑥. 相手の興味関心事を重視する
- ⑦. メッセージは短信につとめる
- ⑧. 情報を提供する
- ⑨. 旅先などから送る
- ⑩. 担当者を無断で変更しない



家族

- ①. 本人にピアサポーターを説明する
- ②. 必ず本人から最小限の同意をえる
- ③. 声掛けをして届いた絵葉書を渡す
- ④. 絵葉書を媒介して世間話をする
- ⑤. 返信を強要してはいけない
- ⑥. 受け取った絵葉書を詮索しない
- ⑦. 反応などを参与観察してみる
- ⑧. 本人の様子を客観的に整理する
- ⑨. ピアサポーターに状況を伝える
- ⑩. 利用を継続するか意思確認する

当事者が内面にもつ可能性を信じる

- ひきこもり支援とは、ひきこもり当事者が本来持つ力を活かす支援ができるかどうかにかかっている。いくら相談支援を拡充しても彼らの活躍できる場面を地域に創り出していくことができなければ、本当の意味での支援とはなりえないのではないだろうか。
- ひきこもり当事者はもはや社会からお世話になるだけの存在ではない。少子高齢化と過疎化に悩む地域社会においては、唯一その地域に残る貴重な若者たちであり、新たな地域を創出する重要な担い手である。
- 彼らの潜在化された能力や活躍できる地域と関係性を創り出し、どう顕在化していくか。これこそがこれからのひきこもり支援の重要な指標になっていくであろう。

田中敦（2014）「苦勞を分かち合い希望を見出すひきこもり支援」（学苑社）

ご清祥ありがとうございました

苦勞を分かち合い
希望を見出す
ひきこもり支援

— ひきこもり経験値を活かすピア・サポート —

田中 敦 著
レクター・ポスト・フレンド相談ネットワーク

本体 1800 円＋税
A5 判 ● 156 ページ
● ISBN978-4-7614-0762-9

ひきこもり者の思い

自立するということは、普通に学校や仕事に行けなくなってしまった私たちにとって何よりも難しく不安に感じることもある。当然のように収入を得ている人に理解することは、なかなかできることではない。だから、それがわかる人たちで、新しい道を開拓していきたい。

今、全国各地でもがき苦しむひきこもり者が一人でも多く元気になり、彼らのすばらしい経験値を活かして、それぞれの地域で活躍していく日がくることを切に願ってやまない。

学苑社 Tel 03-3263-3817 info@gakuensha.co.jp 102-0071 東京都千代田区富士見 2-14-36
Fax 03-3263-2410 http://www.gakuensha.co.jp ▶▶ 最寄りの書店へご注文ください

2017/6/21